

## 東一夫関連文書（ロシア国立社会政治史文書館所蔵）

島田 顕<sup>†</sup> [訳]

### Azuma Kazuo\_The Famous Educator and Researcher of Russian Language and Russian Literature and the Founder of Institute of Russian Language “MIR” in Japan (Documents and Materials about Azuma Kazuo and Commentary)

Akira Shimada

Azuma Kazuo is a famous educator and researcher of russian language and russian literature and the founder of Institute of russian language “MIR” in Japan. He has translated and published many books and his Institute has produced many great scholars, teachers, interpreters, translators, and diplomats etc.

He has been stayed in Soviet Union since 1941 until 1957. But nothing was known about him excluding the fact that he was working in japanese section of Radio Moscow (Radiobroadcasting programmes in japanese in Khabarovsk and later in Moscow) and in japanese section of the Publishing Company of Foreign Language in Moscow (later named “PROGRESS”). It is unknown why and how he entered into Russia. The individual file of Azuma Kazuo was discovered in Russian State Archive of Socio-Political History (Comintern Archives, RGASPI in Moscow) recently. This paper intends to reproduce person's real image (activity) of Azuma based on these historical materials and presents future tasks.

This paper consists of four sections: first, summary of his life; second, commentary of his documents (his life in before entry to USSR, activity in Khabarovsk and Moscow, etc.); third, his document; fourth, generalization of his documents and future tasks.

#### 1. はじめに一東一夫とはどんな人物か

東一夫は、ロシア語学校のミール・ロシア語研究所（2013年閉鎖）の創始者であり、日露関係の発展に大いに貢献した人物であり、日本における著名なロシア語翻訳者、ロシア語教育者で、妻東多喜子との共書である『標準ロシア語入門』、『標準ロシア語会話』<sup>1</sup>は、今でも遜色のない代表的なロシア語学習書といえる。また東の指導の下ミール・ロシア語研究所は、ロシア語教員、通訳・翻訳者、外交官、新聞記者など多くの優れた人物を輩出した。

東は、1919年10月15日に生まれ、1940年もしくは1941年頃に入ソ<sup>2</sup>、1954年にソビエト文学作

---

<sup>†</sup> 関東学院大学経済学部講師

<sup>1</sup> 『標準ロシア語入門』、白水社、1971年。1971年版が初版、以後、1973、1974、1979、1981、1986、1994、2003年に改訂版が出版された。『標準ロシア語会話』、白水社、1968年。1968年版が初版、1970、1974、1980、1993年に改訂版が出版された（1970年の改訂版から『標準ロシア語会話』としている）。

<sup>2</sup> 『ミール・ロシア語研究所 55年の軌跡 生徒の文集』、ミール文集編集委員会、2013年によれば、「在ソ17年」との記載があり、ここから東の入ソ時期が1940年、もしくは1941年頃と推定できる。

品選集文庫のゴリーキー著「アメリカ紀行」を翻訳（外国語図書出版社）、1952～57年にモスクワでザルービン、ロジェツキン両教授と露日辞典編纂に従事<sup>3</sup>。1958年1月、ソ連から帰国、1958年3月に井上満と日ソ文化通信社設立、『日ソ文化通信』（週刊）発行。1958年6月にミール・ロシア語研究所の前身である「ミール露語教室」を開設（これ以前に東京都世田谷区経堂の日ソ学院〔現・東京ロシア語学院〕で教えていたという）。1960年代には、『ウクライナのおとぎばなし「テブクロ」』（外国語図書出版社）、パジョーフ『銀のひずめをもったやぎ』（外国語図書出版社）を翻訳（刊行年不明）、さらに『世界名詩集大成』第13巻に所収された、エセーニンの「二十六人のバラード」、アンナ・スネーギナを翻訳した（1960年、1964年）。2005年9月に胆管がんの診断を受けた後、腎不全で死去した。享年85歳。

東についてわかっていたのは、入ソ時期、入ソのきっかけのみで、ソ連での活動などは謎に包まれてきた。モスクワ放送（後のロシアの声、現在はラジオ・スポーツニク）の日本語放送（ハバロフスク放送局、モスクワ放送局）に従事していたことでも知られているが、その仕事の内容については明らかになっていない。これまでに回想録等で東について記していたのは、ハバロフスク放送局に勤務しその後帰国した木村慶一のみだった。しかしながら木村慶一は、東一夫を「東和夫」と記していたために、東一夫だと特定してよいかどうか、疑問の余地があった。今回発見された文書と照らし合わせてみると、疑問が完全に打ち消されたといえよう<sup>4</sup>。モスクワ史料調査で見つかった史料によって、これまで知られていなかった東のソ連での活動の実態が、わずかだが、明らかになった。

東の史料は、ロシア社会政治史文書館（RGASPI）の東一夫名の個人ファイル（РГАСПИ, ф. 495, оп. 280, д. 456.）で保管されていたもので、文書史料には、1～17枚目（л. 1-17.）までの番号が付けられている。時系列に並べると、14～17枚目（1951年9月1日）が一番古く、以下12～13枚目（1951年9月5日）、8～10・11枚目（1956年9月13日）、4～5・6枚目（1957年3月6日）、1枚目（1957年3月12日）、3枚目（1957年3月15日）、2枚目（1957年3月17日）の順に新しくなっている。おそらく一番先に14～17枚目をファイリングし、順次文書をファイリングして、最後に上からナンバーリングしたようだ。1～13枚目（л. 1-13.）以降の、14枚目、15枚目、16枚目、17枚目（л. 14, 15, 16, 17.）には、裏面（л. 14 об., 15 об., 16 об., 17 об.）があるので、コピー用紙としては全部で20枚になる。これらのうち、小カードで大した情報もない2枚目<sup>5</sup>、3枚目<sup>6</sup>、7枚目<sup>7</sup>（л. 2, 3, 7.）と、文書

<sup>3</sup> *Русско-японский словарь (составили С.Ф. Зарубин и А.М. Рожецкин)*, Москва, «Советская энциклопедия», 1964. (『露日辞典』S・F・ザルービン、A・M・ロジェツキン共編、モスクワ、ソヴィエツカヤ・エンツィクロペディア〔ソヴィエト百科事典〕出版社、1964年)

*Большой русско-японский словарь, около 150000 слов и словосочетаний (с практической транскрипцией)*, С.Ф. Зарубин и А.М. Рожецкин, Москва, «Живой язык», 2010. (改訂版、2010年)

<sup>4</sup> 木村慶一『モスクワ・日本・ハバロフスクー対日モスクワ放送員の手記一』、川崎書店、1949年。

<sup>5</sup> РГАСПИ, ф. 495, оп. 280, д. 456, л. 2.: 同志モシェトフ・V・V, シェルバコフ宛、3月17日付〔小さなカード、サイン3種、読めず、1957年3月17日と思われる〕

<sup>6</sup> РГАСПИ, ф. 495, оп. 280, д. 456, л. 3.: ソ連共産党中央委員会〔□□〕部宛て〔部署の名前わからず〕、同志ヴィノグラドフ・I・T宛て、同志シェルバコフ・I・Sとの合意に関して、1957年3月15日付、同志ブルガーニン・N・Aの書記局〔小書記局〕〔л. 2. と同じく小さなカード、サインあり、読めず〕。

<sup>7</sup> РГАСПИ, ф. 495, оп. 280, д. 456, л. 7.: 同志バスコフ・K・M, 同志コヴィジエンコ・V・Z, 同志ヴェシェンコ宛、1956年9月15日付〔小さなカード〕。

が封入されていた封筒と思われ、同様にめぼしい情報のない6枚目<sup>8</sup>、11枚目<sup>9</sup>（л. 6, 11.）を除いた文書の訳文を、若干の解説とともに、そのまま紹介したい。尚、[ ] で示したものは訳注である。

## 2. 発見された史料について（解説）

### 2.1 入ソからモスクワまで

史料中の最大の発見は「東一夫」が偽名だったことだろう。本名は「しみず・ちょういち」、ただし漢字による署名など、「しみず・ちょういち」の漢字を特定する文書史料はない。出身地は北海道の名寄（東京とする文書もある）、父はしみず・みきぞう、東京市出身の小商人、母はしみず・とめよ、仙台市出身、両親とも1895年から1896年にかけての出生であるが、母は1936年から1937年にかけて死亡したらしい。徴兵前の住所は東京都神田区である。また1946年以降父との連絡は途絶えている。尋常小学校、尋常小学校高等科（高等尋常小学校）、大学予科を経て、東京の『とうほう日報』新聞に就職、新聞編集部で通信員見習、のち通信員として働いていたが、徴兵により辞職した。しかしながら、“とうほう”の漢字名を特定するものがない。

1940年1月から満州の日本陸軍〔関東軍〕、南樺太の日本軍部隊で兵士として軍務に服していたが、軍務の難しさど、日本における帝国主義体制の存在に対する不満のために、国境を越えたという。つまり、入ソのきっかけは敵前逃亡だった。しかも逃亡は二回で、1940年2月の一回目の逃亡は失敗し、懲罰（1年間の禁固）を受けた。1941年3月に釈放され、3か月後の1941年6月に再び逃亡、日本領南樺太からソ連領北サハリンへの陸上国境を渡っている。南北樺太の陸上国境の侵犯は、岡田嘉子、杉本良吉と同じ方法である。国境を無断で越えれば、当然ながら国境侵犯となり、直ちに拘束され、尋問が行われたのだが、その際「日本共産党の任務」であることを証言するものの、党籍は確認されず、身柄拘束は二年近くに及んだ。身柄はサハリンからハバロフスクに移され、ハバロフスクで取り調べ、さらに長期間の拘束が行われた。東にはスパイ容疑がかけられたのだが、結果的にスパイだという確証は得られなかったようだ。おそらく、岡田嘉子たちとは異なり、戦争中であり、粛清も1937年当時の激しさはなくなっていたことが幸いしたのだろう。

1943年まで拘禁状況が続き、ハバロフスクで釈放された後、偽名である「東一夫」を名乗るようになる。ハバロフスクのタス通信支局で、報告者・調査員〔レファレント〕として働き、本人の希望により退職した。1946年7月（同年春とする文書もある）から1946年12月まで、南樺太ユジノ・サハリンスク（旧名・豊原）の『新生命』<sup>10</sup>新聞編集部で、やはり報告者・調査員として従事した後、1947年1月からハバロフスク市ラジオ委員会（モスクワ放送ハバロフスク支局日本語課）で翻訳者として働く。ハバロフスクの住所は「カール・マルクス通り」〔番地なし〕だが、これは在ハバロフスクの日本人が宿泊していた「極東ホテル」と思われる。

東には内縁の妻（結婚は登録されていない）がいた。新史料によれば名前は、アンナ・ニコライエヴナ・トレスキナ、1924年生まれ、ブリヤート出身のロシア人だった。このことも、これまであま

<sup>8</sup> РГАСПИ, ф. 495, оп. 280, л. 456, л. 6.: ブルガーニン宛て [л. 4-5. の請願書が入っていたと思われる封筒, 差出人は東本人]。

<sup>9</sup> РГАСПИ, ф. 495, оп. 280, л. 456, л. 11.: [л. 8-10. が入っていたと思われる封筒]。

<sup>10</sup> 樺太で発行されていた日本語新聞の『樺太新聞』が前身である。ソ連軍進駐後廃刊となり、『新生命』新聞として発行されていた。日本人スタッフには、後にハバロフスク放送局の日本語放送に従事する、木村慶一、石坂幸子、その他がいた。

り知られていなかった事実である。ロシア人妻アンナが東の帰国の際にどうなったのかは、文書史料には記されていない。

## 2.2 モスクワから帰国まで

1947年7月（同年春とする文書もある）にモスクワへ転勤となり、全連邦ラジオ委員会（モスクワ放送局日本語課）で働く。転勤の理由として文書には、1943年ごろから病んでいる結核の転地療養であることが記されているが、モスクワでの日本人職員を補充する意味もあったと思われる。石井次郎、滝口新太郎、清田彰、川越史郎<sup>11</sup>らもハバロフスクからモスクワに転勤しているし、石坂幸子<sup>12</sup>、木村慶一<sup>13</sup>にもモスクワに転勤する話が出ていたからだ。放送局での活動内容については、モスクワ、ハバロフスクともに記載されていない。結核については、1948年に手術を受けたことや、穿孔が5つあることが文書に記されている。1949年6月から再び健康状態が悪化し、放送局で働くことができなくなり、年金をもらって療養生活（第一グループの障害者）にあることが記されている。帰国までに健康状態は良くなったのかどうかについて、文書では述べられていない。内縁のロシア人妻アンナ・ニコライエヴナ・トレスキナも結核にかかっている、妻の方が重篤で、寝たきり状態であったという。だが病身であるにもかかわらず、夫に献身的に尽くしていたようだ。

東がモスクワで外国語図書出版所（後のプログレス出版所）に勤めていたことも知られていたが、これについては、文書の一部に和露辞書の特別編集者、著者として活動という記載があるのみで、外国語図書出版所での活動は正確に記されていない<sup>14</sup>。おそらく放送局を辞めて年金生活に入った後、家でできる仕事としてこの仕事を選んだようだ。この後帰国まで外国語図書出版所で働いたと思われる。

東のモスクワでの最初の住所は、「モスクワ市ゴーリキー通り49番地の科学者ビルのホテル」、さらに最後の帰国直前の住所は、「ゴーリキー通り26/1番地、64号室」だった。放送局を退職して、年金生活に入った後から帰国前の移転までは、モスクワ州、サルトゥイコフカ駅（モスクワの東部）近くのいわゆるラジオ集落のダーチャ「菜園付き別荘」、つまりは放送局が管轄する場所に住んでいた。文書には唯一、ダーチャの中の様子が記されており、鉄道寝台、鉄道用ペーチカがあった。これらがどのようなものだったのかはわからないが、おそらく粗末なものだったようだ。ところで、モスクワにいた外国人は「ホテル・ルクス」<sup>15</sup>に居住させられ、一般住宅に住むことはできなかったが、東の最初と最後の住所は、都心の目抜き通りである「ゴーリキー通り」（現在は「トゥヴェルスカヤ通り」）に位置しており、このことから東が外国人扱いではなかった、もしくは破格の待遇を受けていたことがわかる。ちなみに、住所的に「トゥヴェルスカヤ通り49」はなく、おそらくこれは秘密の住所だと思われる。なぜダーチャを引き払い、また都心に戻ったのかはわからない。

<sup>11</sup> 川越史郎『ロシア国籍日本人の記録 シベリア抑留からソ連崩壊まで』、中央公論社、1994年。

<sup>12</sup> 石坂幸子「私はスパイではない 一年半を対日放送に暮らした女アナウンサーの手記」『婦女界』第37巻11号、1949年11月、74-80頁。NARA, Records of the Army Staff (Records Group 319), Investigative Records Repository (IRR) Personal Name Files, 1939-1976 Japanese, Chinese Korean, Ishizaka Sachiko, XA537159, 095.

<sup>13</sup> 木村慶一前掲書、68-70, 104-108頁。

<sup>14</sup> РГАСПИ, ф. 495, оп. 280, л. 456, л. 4-5.

<sup>15</sup> ルート・フォン・マイエンブルク『ホテル・ルクス—ある現代史の舞台』、大島かおり訳、晶文社、1985年。住所的にホテル・ルクス（後にツェントラーリナヤと改称）はトゥベルスカヤ通り10番地である。

文書のうち請願書には、日本に帰りたがっていること、給料・貯金をルーブルから両替したがっていること、帰国後の予定、希望、夢（日本でのロシア情報の雑誌発行）、などが述べられている<sup>16</sup>。そのためにソ連滞在中に稼いだ金（ルーブルで1万5千ルーブル、当時の日本円に直すと約135万円である）を日本円に両替して日本に持ち帰ることを許可するよう求めている（当時ルーブルは外国に持ち出すことができなかった）。この文書から、当時の年金（800ルーブル）、障害者給付金（第一グループの障害者で、月に261ルーブル、加えて一時給付金300ルーブル）がどのくらいの額だったのかがわかる。加えて請願書では、まずソ連政府に対する謝辞が語られている。シベリア抑留者も帰国の際、ソ連国家、政府、スターリンに謝辞を述べている。

最後に、「1957年3月に出国した」とあり、文書の日付が3月12日であることから、出国が3月12日の直前であると想像できる。船などの交通手段を含めた帰国方法については一切書かれていない。

### 2.3 KGB（ソ連国家保安委員会）との関係

東一夫とKGBが、密接な関係にあったことをうかがい知ることのできる文書が見つかった。そもそもKGB（前身のNKVD内務人民委員部から分かれた）は国境警備をも担当する組織である。東が国境侵犯後、その身柄を拘束したのはKGBだった。それ以来、KGBとのつき合いは長かったといえる。当初、東には日本の偵察組織から派遣されたという疑いがかけられていた。大粛清の時期にはこのこと自体が処罰の理由となっていたが、前述したように東が越境したのは大戦期で、粛清の嵐もおさまっていたことが幸いした。また東本人も積極的に国外での非合法活動、革命活動に加わる意向・希望を示したので、刑法犯として処罰を受けなかった上に、1943年に釈放され、非合法活動の養成が行われることになった。理由として、本人の固い意志が認められたということもありうるが、それよりも、東を釈放して活動に投入した方が役に立つとみなされたことが考えられる。

加えて、その後も養成、活動を通じて、KGBとの関係は続いていて、タス通信にいた時も、ハバロフスクで放送局に勤務していた時も、養成、秘密活動が続けられていたといえよう。だが東が結核にかかったことにより活動への本格的な投入は中止された。活動も途絶えたかに見えたが、東に対する監視は続けられていたようだ。文書によると、井上満との書簡の内容が記されているからである。東の帰還の意向も知られていた。だから、非合法活動への関与、養成が行われたからといって、東が全幅の信頼を勝ち取っていたわけではない。

東はなぜ日本に帰されたのだろうか。ソ連にいた日本人は国内に留まるよう促された。例えば、石坂幸子はロシア人と結婚するよう上司から求められていた。だが東が帰ることができたのは、東をロシアに残すことよりも、日本に帰した方が得策と判断されたものと思われる。もちろん公に東自身が述べていた雑誌発行によるソ連文化の伝播の役割もあっただろう。だが日本におけるエージェントとしての役割も担わされていたのではないだろうか。日本に帰国したからといって簡単に断ち切れる関係ではない。

前述の木村慶一以外の放送局勤務者が東のことを全く語っていないことも不可思議なことである。

---

<sup>16</sup> この価格は、前述の『ミール・ロシア語研究所 55年の軌跡 生徒の文集』で示された価格と一致している。

例えば、放送局関係者で最も多く回想録を残しているのは岡田嘉子である。また片山やす、川越史郎にも回想録がある。しかしこれらの回想録も東のことには触れていない。ソ連社会では、他人のことには必要以上に関与しないという不文律はあったにせよ、東のことだけ、全く触れていないのは解せない。特に川越は、東以外の一緒に働いていた同僚たちについて触れているからである。何らかの理由で、東のことだけは触れてはいけないという自己制止がかかっているとしか考えられない。だとすると、東の KGB との関係が影響していることは間違いないだろう。

### 3. 史料

#### 3.1 略歴

東一夫に対する証明書 [スプラフカ]<sup>17</sup>

東一夫（本名しみずちょういち）は、1919年10月15日、東京の商人の家に生まれた。1940年から41年まで満州の日本陸軍に軍務、1941年に戦場での日本軍からの敵前逃亡、ソ連に逃げ込んだ。東の言葉によれば、彼は、日本共産党の任務によりソ連に入ったということであるが、東の日本共産党への所属は確かなものではない。

1947年まで、東は、タスの支部で翻訳者として、後にハバロフスクのラジオ委員会で働いた。1947年7月から、モスクワの全連邦ラジオ委員会で、翻訳者として働いた。1949年から、健康状態の悪化により、常勤の仕事を持たず、月額800ルーブルの年金を受け取っている。モスクワ市ゴリキー通り26/1番地、64号室に居住している。東一夫は、1957年3月に日本にむけて出国した。

1957年3月12日

V・コヴァリエンコ

#### 3.2 帰国時の請願書

モスクワ市ゴリキー通り26/1番地、64号室に居住する東一夫から、ソ連閣僚会議議長同志ブルガーニン・N・Aへの請願 [書]<sup>18</sup>

私、東一夫は、1941年からソ連に住み、あなた方の庇護、そして配慮に対し、心から、あなた方、そしてソヴェト政府に感謝しております。

私と私の妻は、生活のために十分な稼ぎがあります。加えて、私たちは毎月ソヴェト国家から年金(800ルーブル)をいただいております。私たちには、都心に良く整備された二つ部屋のアパートがあります。一言でいえば、私たちの物質的な生活はよく保証されています。

このことにもかかわらず、私たちは、最近、祖国日本への帰還に関する申請を出しました。なぜなら、私の祖国にあって、私は、日本人民に対する大きな寄与をもたらすことができると確信しているからです。

ソ連亡命後、私は、タス、ラジオ委員会、外国語図書出版所、その他で働いていました。現在、私

<sup>17</sup> РГАСПИ, ф. 495, оп. 280, л. 456, л. 1. この文書は、東の帰国直後に作られたものと考えられる。手書き、ロシア語で書かれた。

<sup>18</sup> РГАСПИ, ф. 495, оп. 280, л. 456, л. 4-5. この文書も帰国直前に書かれたものと思われる。前述の文書の日付が3月12日での文書の日付が3月6日であることから、両者の日付の間に出国したことが推察できる。文書は、手書き、ロシア語で書かれている。

は、露和辞典の特別編集者兼著者として、また日ソ友好協会のモスクワ通信員として、働いております。私は、祖国に帰ったのちに、ソ連で私が得た最大限の知識を実践することを望んでいます。私は、ソ連文化に関する小さな雑誌を日本で編集・発行することを決心し、まさにこれによって日本の民主化に微力ながら貢献し、ソ連と日本間の文化的関係の強化に貢献することを決心しました。

雑誌発行のためには、大量の資金が必要です。例えば、5000部の月刊雑誌（100円）発行のためには、140万円の資金が必要です。なぜなら、日本では全書店が、その発行の4か月後によく、雑誌に対する支払いを行うからです。

しかしながら、祖国で私は何の資金も持ってはいません。私は、雑誌発行のためには、私がソ連で稼いだソヴェト・ルーブルしか使用できないのです。

私は、私が1万5千ソヴェト・ルーブルを日本円（大体135万円）に両替することを、私に許可していただくよう、あなた方に切にお頼み申し上げます。私の願いを、あなた方が拒否なさらないなら、私は本当にあなたに感謝することでしょう。

1957年3月6日

東一夫

### 3.3 KGBの報告書

ソ連

ソ連閣僚会議附属国家安全保障委員会

第二総局

1956年9月13日

番号2/5-114<sup>19</sup>

ソ連閣僚会議附属国家安全保障委員会第二総局に、東一夫に対する次の資料がある。

すなわち、1919年生まれ、北海道名寄市出身のしみずちょういちが、1941年にソヴェト・サハリンで国境侵犯で拘束された。取り調べで、しみずは、自分が小商人の家の出で、中等教育を受けたことを示した。徴兵まで、東京の『とうほう日報』新聞の編集部で働いていた。その後、南サハリンの日本軍部隊で兵士として軍務に服していた。彼によれば、軍務の難しさと、日本における帝国主義体制の存在に対する不満のために、国境を越えたという。

しみずが、スパイ目的で日本の偵察によってソ連に送り込まれたとする根拠があったために、彼は、かなり長い期間、ハバロフスク国家安全保障機関のしかるべき取り調べを受けた。しみずの取り調べの間、日本の偵察と彼の間に関する証拠は、得られなかった。日本帝国主義と闘うという意向をしみずが表明していたことを考慮して、しかるべき養成活動を彼に施し、国外での活動に彼を利用することが決定された。これらの目的から、1943年に、しみずは、監獄から釈放され、ハバロフスク市で東一夫の名前が偽名として合法化され、タスのハバロフスク支局に調査員として就職させられた。

ハバロフスクにあって、東は、何度も、我々の職員たちに対して日本共産党の方針による「革命闘

<sup>19</sup> РГАСПИ, ф. 495, оп. 280, д. 456, л. 8-10. この文書は、タイプで打たれ、ロシア語で書かれている。

争」に彼を派遣することを要請した。間もなく、彼は重い結核症にかかり、国家安全保障機関による国外活動で彼を利用する話は立ち消えた。

1946年春に、東は、南サハリンに赴任し、日本語の地方新聞『新生命』の編集部で働いた。

1946年末に、東は、再び非合法活動に彼を派遣する必要性についての問題を持ち出した。病状の悪化と転地療養の必要性から、1947年春に、東は、日本語の翻訳者として、モスクワの全連邦ラジオ委員会での仕事に派遣された。1948年に行われた外科手術と健康状態の悪化の後、東はラジオ委員会での仕事をこれ以上続けることができなくなった。彼には年金が与えられた。加えて、これまでに、彼は、家での外国語図書出版所の翻訳の仕事を行っている。

東は、重い健康状態にもかかわらず、モスクワで生活して、再び、そして何度も、国外での「革命活動」へと彼を派遣することの合目的性の問題を、我々に突き付けた。

国家安全保障機関とともに、東は、1944年から1955年まで活動した。東の健康状態の悪化により、エージェントとしての東の暗号解読に関して入った情報により、地元の日本人との彼の連絡の直前に、東との連絡は中断された。

東は、日本の「ナウカ」出版所の幹部の一人である、井上満と文通を行い、文書をやり取りしている。井上に宛てた書簡の中で、東は、日本への帰還の意向を明らかにしている。

ソ連関係会議附属国家安全保障委員会第二総局局长

グリバコフ

[サイン]

### 3.4 診察報告書

患者の東一夫の診察記録<sup>20</sup>

今年の9月1日に政治亡命者援助部のV・N・スエチノヴァ部長の依頼で、私は、日本人の政治亡命者で、病気療養中の東一夫の診察に向かった。東一夫は、モスクワ州、サルトウイコフカ駅、ラズィン街道、ラジオ情報委員会集落、第9ダーチャに暮らしている。

診察で次のことが確認された。すなわち、

東一夫は、1919年生まれの日本人で、無党派、無国籍、既婚者で、隔離[もしくは潜在的]肺結核、結核性の腎臓炎(腎臓の一つは摘出された)、結核性の膀胱炎で1943年から病んでいる。1949年から、第一グループの障害者で、月に261ルーブルを受け取っている。

妻のアンナ・ニコライエヴナ・トレスキナ(登録なしの結婚)は、1924年生まれのロシア人で、ソ連国籍、1947年に自動的に全連邦共産党(ボ)の隊列から離れ、穿孔の多い肺結核で1943年から病んでいる(5つの穴[穿孔]がある)。1946年から第一グループの障害者で、月に201ルーブルを受け取っている。

東一夫は、1941年に政治亡命者としてソ連にやってきた。

1941年から1946年までのソ連滞在中に、ハバロフスクのタス通信で報告者・調査員として働き、1946年から6か月間、南サハリンで『新生命』の編集部で翻訳者として働き、1947年からモスクワ

<sup>20</sup> РГАСПИ, ф. 495, оп. 280, д. 456, л. 12-13. この文書は、タイプで打たれ、ロシア語で書かれている。

市の全連邦ラジオ委員会へと転勤させられた。モスクワでは、障害者となるまでに、すなわち 1949 年まで、翻訳者として働いた。

モスクワの全連邦ラジオ委員会での在職中、彼は、モスクワの科学者ビルのホテル、すなわち、ゴリキー通り 49 番地に住んでいた。

障害者となるときに、彼は、サルトゥイコフカ駅の部屋に引越し、現在もそこに住んでいる。

東一夫が占めている部屋は、ラジオ情報委員会集落の冬のダーチャの一階にあり、6~7 平方メートル、一等車の鉄道寝台よりなる家具、二つの机、小卓、壁かけの本棚があるだけで、あらゆる設備が備わっていない。

部屋の中には、小さな鉄道用のペーチカがあり、気化したあたたかさを与えている。

東一夫が住んでいる集落は、駅から 2 から 2.5 キロメートルのところに位置しており、予防やその他の必要な制度を伝えることをかなり困難にしている。

東一夫は、現在レウトフスクの地区予防の監視下に置かれていて、結核治療薬を服用している。

東一夫に対する、物質的な援助を与えることについての私の申し出に対して、彼は、もしも翻訳での恒常的な仕事を持つことができるならば、その条件で自ら直すことができると述べ、断固拒否し、恒常的な仕事の保証で彼に協力することを依頼した。

訪問の際、東一夫は、受け取ることを拒み続けた 300 ルーブルの一時的な援助を拒否した。

彼の妻である、A・N・トレスキナもまた、重病で、常に高熱である。健康状態では、A・N・トレスキナは寝たきりであるが、彼らが恒常的な援助を何も受けていないことで、彼女は病気の夫の看病、自分自身の看病に奮闘することを強いられている。

ティメネヴァ

[サイン]

1951 年 9 月 5 日

### 3.5 身上調査書

#### 調査書<sup>21</sup>

|    | [質問項目]   | [記入内容]                                   |
|----|--|--|
| 1. | 姓名、父称。姓名が変わった場合は、以前はどのような姓名だったのか（どこで、いかなる期間、理由で変わったのか）。  | 東一夫。1941 年まで姓名はしみずちょういちだった。移民の後、変更 [した]。 |
| 2. | 生年月、出生地（新旧の行政区画毎に指し示すこと [記入すること]）。                       | 1919 年 10 月 15 日。東京。                     |
| 3. | 民族と市民権（もしも外国籍を持っていた場合、いつまで [持っていたのか] かを指し示すこと [記入すること]）。 | 日本人。市民権なし。                               |
| 4. | 身分、もしくは社会的出身（農民、中産階級、商人、貴族、名誉市民、聖職位、軍階級、その他）。            | 商人の家庭の出身。                                |

<sup>21</sup> РГАСПИ, ф. 495, оп. 280, л. 456, л. 14, 14 об., 15, 15 об., 16, 16 об., 17, 17 об. 身上調査書は、質問項目があらかじめ印刷された用紙に、東本人の手書きであり、ロシア語で記入されたものである。写真を張り付ける位置があるが写真はない。日付は、1951 年 9 月 1 日である。質問項目は以下の 32 項目である。第 17, 18, 21 項目に見られるように、この用紙が第二次世界大戦後に改めて作られたことがわかる。また面談者の署名があることから、まず東が記入し、これをもとに東と面接官との面談が行われたようだ。

島田 顕

|     |   |   |
|-----|---|---|
| 5.  | 教育、本業（職業、教育の経験毎に）、学位（学問上の称号）。科学的業績、発明があるか。  | 高等。新聞社勤務員。言語、文学を学んだ。  |
| 6.  | どのような外国語を習得しているか。   | 日本語、ロシア語。   |
| 7.  | 党籍と党歴。全連邦共産党（ボ）、もしくは兄弟共産党への入党時期；党員証、党員候補証の番号。どのような組織に受け入れられたか（地方、州、共和国）。  | 無党派。  |
| 8.  | 全連邦共産主義青年同盟、もしくは兄弟共産主義青年同盟への加盟時期；同盟証の番号。  | 加盟していなかった。  |
| 9.  | もしも全連邦共産党（ボ）、全連邦共産主義青年同盟、もしくは兄弟共産党、兄弟共産主義青年同盟に以前加盟していたならば、どのような期間か、どのような脱退の理由かを指し示すこと [記入すること]。他の政党に加盟したことはあるか。                     | 加盟していなかった。  |
| 10. | 共産党、もしくは共産主義青年同盟への所属前の懲罰はあるか（どこで、いつ、どのような理由で、どのような懲罰か、何のために、懲罰は減じられたか）。   | 処罰を受けたことはなかった。  |
| 11. | 共産党の方針遂行における揺らぎはあったか、反対派、反党的グループに参加したことはあるか（どこで、いつ、どのようなものか）。   | 揺らぎはなかった。   |
| 12. | あなた、もしくはあなたの親類が、裁判、予審にかけられたことはあるか；裁判手続き、行政手続きで、逮捕、もしくは処罰されたことはあるか；選挙権をなく奪されたか（どこで、いつ、何のために）。裁判、予審のものにはないか、現在裁判による刑が執行されていないか。       | 1940年に日本陸軍からの逃亡のため、1941年に1年間の禁固の処罰を受けた。                       |
| 13. | あなた、もしくはあなたの親類が、革命活動のために裁判、予審にかけられたことはあるか（どこで、いつ、何のために）。  | 裁判、予審にかけられたことはなかった。   |
| 14. | どのような国にいたことがあるか（どこで、いつ、何に従事していたか）。  | 1919年から1941年まで日本。<br>1941年から1か月間満州にいた（監獄に）。<br>1941年からソ連に住んだ。 |
| 15. | あなた、もしくはあなたの妻が、現在、ソ連以外に親類がいるか、もしくは過去にいたか（誰か、どこでか）。彼らとの連絡は保たれているか（過去に [連絡は] 保たれていたか）。  | 日本には父しみず・みきぞうがいる。父との連絡は途絶えている。                                |
| 16. | あなた、もしくはあなたの親類が、ソ連に対して戦う軍隊の軍務に服していたか（どこで、いつ、官位、階級を指し示すこと [記入すること]）。   | 私も、私の親類も軍務していなかった。  |
| 17. | あなた、もしくはあなたの親類が、第一次世界大戦、第二次世界大戦、内戦の時期に捕虜、もしくは拘束されていたか。  | なかった。   |
| 18. | あなた、もしくはあなたの親類が、大祖国戦争期に捕虜、もしくは包囲されて、ドイツ軍によって一時的に占領されていた領土にいたことがあるか（どこで、いつ）。   | なかった。   |
| 19. | 赤軍に軍務していたか（どこで、いつ、最終的な階級、軍事的称号）。もしも、現在軍務に服しているのならば、階級、軍事的称号を指し示すこと [記入すること]。もしも、赤軍徴兵猶予をもっているならば [にあるのなら]、軍の登録にあることを指し示すこと [記入すること]。 | 軍務していなかった。  |
| 20. | 他国の軍隊の軍務に服していたか（どこで、いつ、どのような身分で [あったか]、どのような官位を持っていたか）。   | 1940年に日本陸軍に。  |
| 21. | 内戦、大祖国戦争期の戦闘に参加したか（どこで、いつ、どのような身分で）。  | 参加したことはなかった。  |
| 22. | パルチザン活動、地下活動に参加したか（どのようにして参加したか、どこで、いつ遂行された活動か）。  | 参加したことはなかった。  |
| 23. | 健康状態（怪我、打撲傷を負っているか、どのようなものを、いつ受けたか）。  | 怪我、打撲傷を負っていない。第一グループの障害者である。                                  |

東一夫関連文書（ロシア国立社会政治史文書館所蔵）

|                    |   |  |                            |                              |     |                       |     |
|--------------------|---|--|----------------------------|------------------------------|-----|-----------------------|-----|
| 24.                | 第 29 項目に挙げられた親類のうち誰が他党にあるのかを指し示すこと [記入すること]；警察，憲兵，検察，裁判所，監獄施設；国境警備，警備隊で働いていたか。  | 働いていない。  |                            |                              |     |                       |     |
| 25.                | 家族の状況（結婚しているか，独身か，やもめか），あなたの扶養家族の人数を挙げること [記入すること]，彼らの年齢を指し示すこと [記入すること]。もしも，やもめ，離婚，再婚ならば，前妻（前夫）の姓名，父称を指し示すこと [記入すること]。 | 妻はアンナ・ニコラエヴナ・トレスキナである。結婚は登録されていない。                     |                            |                              |     |                       |     |
| 26.                | あなたの住所，いつから現在の住所に居住しているのか，住所，職場の電話番号。   | サルトゥイコフカ駅，バラシヒン織物 [意味不明] 地区，ラズィン街道，ラジオ情報委員会集落，第 9 ダーチャ |                            |                              |     |                       |     |
| 27.                | 以前に住んでいた住所を列挙すること（一年以上の期間のものを），いつの時期か。  | 1919 年から 1941 年まで，日本，東京市，神田区。                          |                            |                              |     |                       |     |
|                    |   | 1941 年から 1946 年まで，ハバロフスク市，カール・マルクス通り。                  |                            |                              |     |                       |     |
|                    |   | 1946 年 6 月から 7 月までユジノ・サハリンスク市，住所はおぼえていない。              |                            |                              |     |                       |     |
|                    |   | 1947 年 1 月から 7 月まで，ハバロフスク市，住所はおぼえていない。                 |                            |                              |     |                       |     |
|                    |   | 1947 年から 1949 年まで，モスクワ市，ゴリーキー通り，49 番地，77 号室。           |                            |                              |     |                       |     |
| 28.                | 勤労活動の最初から何に従事していたのか（教育機関のすべてにおける教育期間，軍務期間を含む）。  |  |                            |                              |     |                       |     |
| 日付（月，年）            |   | 職位   |                            | 企業，組織，機関，教育機関，その他の名称，それらの所在地 |     | 辞職，もしくは転職の理由          |     |
| 就職                 | 辞職  |  |                            |                              |     |                       |     |
| 1928 年 4 月         | 1932 年 4 月  | 学生   | 東京市内小学校 [尋常小学校]            | 卒業                           |     |                       |     |
| 1932 年 4 月         | 1934 年 4 月  | 学生   | 高等小学校 [高等尋常小学校]            | 卒業                           |     |                       |     |
| 1934 年 4 月         | 1937 年 4 月  | 学生   | 大学予科                       | 卒業                           |     |                       |     |
| 1937 年             | 1940 年  | 通信員 [コレスポンデント] 見習，のち通信員                                | 『どうほう日報』新聞編集部              | 徴兵により辞職                      |     |                       |     |
| 1940 年 1 月         | 1940 年 2 月  | 兵士   | 日本陸軍                       | 逃亡                           |     |                       |     |
| 1940 年 2 月         | 1941 年  |  | 軍からの逃亡のための監獄での懲罰           |                              |     |                       |     |
| 1941 年 3 月         | 1941 年 6 月  | 兵士   | 日本陸軍                       | 逃亡                           |     |                       |     |
| 1941 年 6 月         | 1946 年  | 報告者・調査員  | タス通信ハバロフスク支局               | 本人の希望により退職                   |     |                       |     |
| 1946 年 7 月         | 1946 年 12 月   | 翻訳者  | ユジノ・サハリンスクの『新生命』新聞編集部      | ハバロフスクの職場に転動。                |     |                       |     |
| 1947 年 1 月         | 1947 年 7 月  | 翻訳者  | ハバロフスク市ラジオ委員会              | モスクワ市のラジオ委員会へ異動              |     |                       |     |
| 1947 年 7 月         | 1949 年 6 月  | 翻訳者  | モスクワ市の全連邦ラジオ委員会            | 第一グループの障害者                   |     |                       |     |
| 29.                | あなたの近しい親類の情報（妻，成年に達した子供たち，母，父，従兄弟，従姉妹に関する情報を指し示すこと [記入すること]。妻は自らのアンケートの中で夫，自らの近しい親類に関する情報を指し示すこと [記入すること]）。             |  |                            |                              |     |                       |     |
| 姓・名・父称（完全に [遺漏なく]） | 続柄  | 生年   | 出生地（新行政区画で指し示すこと [記入すること]） | 民族                           | 党籍  | 職場の場所（地位と正確な住所）       | 現住所 |
| しみず・みきぞう           | 父   | 1895 年<br>1896 年                                       | 東京市                        | 日本人                          | 無党派 | 1946 年以降の情報を私は持っていない。 |     |
| しみず・とめよ            | 母   | 1895 年<br>1896 年                                       | 仙台市                        | 日本人                          |     | 1936 年から 1937 年に死亡。   |     |

|                         |  |       |  |      |                       |                    |  |
|-------------------------|--|-------|--|------|-----------------------|--------------------|--|
| アンナ・ニコラエ<br>ヴナ・トレスキナ    | 妻  | 1924年 | ブリヤート・ヤオンゴヤ<br>[意味不明], タバンスキー<br>地区ボソリスク集落 | ロシア人 | 無党派                   | 第一グループの障害者で<br>ある。 | サルトゥイコフ<br>カ駅, ラジオ情<br>報委員会集落,<br>第9ダーチャ |
| 30.                     | 選挙機関への参加。選挙機関の場所。選挙機関の名称。どのような資<br>格で選ばれたか。日付(月, 年), 選任, 離職。       |       |  |      |                       | 参加したことはない。         |  |
| 31.                     | あなたの社会的活動(党的, コムソモール, ソヴェト, 労働組合, そ<br>の他)。                        |       |  |      |                       | 持っていない。            |  |
| 32.                     | どのような勲章を持っているか[受章したか](いつ, そして何によっ<br>て勲章を受けたされたのかを指し示すこと[記入すること])。 |       |  |      |                       | 持っていない。            |  |
| 特徴                      | 身長   |       |  |      |                       | 170 [センチメートル]      |  |
|                         | 瞳  |       |  |      |                       | 黒                  |  |
|                         | 髪の毛  |       |  |      |                       | 黒                  |  |
|                         | その他の特徴   |       |  |      |                       | なし                 |  |
| 個人の署名(明瞭に記入すること)        |  |       |  |      | 東一夫 [ロシア語のサイン]        |                    |  |
| 記入の日付                   |  |       |  |      | 1951年9月1日             |                    |  |
| アンケートを检查し, 個人的に面談した(署名) |  |       |  |      | [面談者のサイン, 手書き, 読み取れず] |                    |  |

#### 4. おわりに

日ロ関係の歴史を語る上で欠くことのできない、モスクワ放送の元日本人職員である東一夫の活動を知りたいと思い、RGASPIの文書史料を調べ始めた。結局、文書からは東のモスクワ放送での詳しい活動を知ることはできなかったものの、関連調査で得られた証言から、東の活動がモスクワ放送の歴史の大きな一部分をなしていることは明らかである。今後の課題は、さらなる関連史資料の調査と、それらをもとに戦後のモスクワ放送の活動、さらにはモスクワ放送での東の活動をまとめあげることである。

しかしながら、今後モスクワ放送関連の東一夫の文書が発見される可能性は限りなく低いといえよう。東の活動を知ることができる文書がモスクワ放送関連以外にあるとしたら、おそらく密接な関係にあったKGBの文書館に何らかの文書史料(例えば個人ファイルなど)があるだろうが、KGB文書館自体が一般に公開されておらず、東文書にアクセスできる可能性は低い。タス通信も同様である。唯一の可能性は、外国語図書出版所関連の文書である。だが外国語図書出版所関連の文書が散逸しているということも耳にしている。

モスクワ、ロシアでの活動だけでなく、さらに東の人生を辿るためには、日本での東の活動を調査することが必要だ。例えば、樺太の『新生命』新聞、また軍歴、軍属について調べる必要があるだろう。さらには、徴兵までの勤務先である『どうほう・にっぽう』新聞の確認、「しみず」姓の遺族の調査、戸籍などにもアクセスできるかもしれない。旧「神田区」内の小学校などの調査(卒業生名簿など)もやってみる価値はある。様々な文書史料を照らし合わせれば、新たな発見がもたらされる可能性はある。可能性がある限りは調べてみる価値はあるだろう。

最後に、今回紹介した文書史料と史料解説は、今なお多くの日本のロシア語関係者に慕われている東本人、家族、関係者を冒し、その名誉を傷つけるためのものではないことをお断りしておきたい。人にはそれぞれ歴史がある。その歴史の一部だけを切り取ってみただけでは、その人物の本当の

姿をとらえたことにはならない。歴史は積み重ねであって、過去にあった出来事が、その人物の人格を成り立たせているのである。だからロシアでの生活を抜きにして東を語ることはできないのである。いずれにせよ今回公開された史料とともに、東の活動は、モスクワ放送の日本語放送の歴史の中で再評価されるべきものとなるだろう。

## 参考文献

『ミール・ロシア語研究所 55年の軌跡 生徒の文集』、ミール文集編集委員会、2013年。

『標準ロシア語入門』、白水社、1971、1973、1974、1979、1981、1986、1994、2003年。

『標準ロシア会話』、白水社、1968、1970、1974、1980、1993年。

『世界名詩集大成』第13巻、ソヴェト篇、ゴーリキー詩集（ゴーリキー著、山村房次訳）他38編、二十六人のバラード（全）、エセーニン著、東一夫訳、アンナ・スネーギナ（全）、エセーニン著、東一夫訳、平凡社、1960年。

Русско-японский словарь (составили С.Ф. Зарубин и А.М. Рожецкий), Москва., «Советская энциклопедия», 1964.

Большой русско-японский словарь, около 150000 слов и словосочетаний (с практической транскрипцией), С.Ф. Зарубин и А.М. Рожецкий, Москва., «Живой язык», 2010.

「露語専門校 半世紀で幕」『毎日新聞』2013年4月20日、地方（東京）版（青島顕記者署名入り記事）。